

遠江・山と里の民俗

会報 第023号



次世代継承活動の紹介①

「川合花の舞を学ぶ」 湖北高校佐久間分校



先日、湖北高校佐久間分校の地域学の授業にて、川合花の舞の継承活動を行った。笛と舞の二つに分かれてそれぞれ練習した。

初めはぎこちなかった生徒も、保存会の方たちの丁寧な指導のおかげで次第に上達していった。実際に本番で使用する「八千代」と「ボウヅカ」を持って「八千代の舞」と「ボウヅカの舞」を練習した。「思ったより疲れたけど楽しかった」「もっと上手に舞えるようになりたい」という感想を頂いた。基本的な舞から変則的な難しい舞も練習し、伝統芸能の大変さと楽しさを実感したようだ。

笛は吹奏楽部の生徒を中心に練習を行なった。川合花の舞の笛はテンポが早い。ため、吹奏楽部の生徒でも苦戦していた。それでも最後は全員で吹けるようになっていて、覚えるのが早くて驚いた。

限られた時間の中で集中して練習し、授業の最後

は舞と笛を合わせることができた。

今回の川合花の舞本番に参加してもらうために、これから生徒たちと継続して

練習を続けていく。そして生徒が、佐久間町の伝統に興味を持ち、継承していくためのきっかけになることを期待する。(文 大石紘明)

佐久間町神妻神社に伝わる面の展示

深山の祝祭—神妻の花の舞—

みやま まつり かづま



11月17日(日)

○静岡文化芸術大学の学生による
ギャラリートーク

○特別披露 川合の花の舞

浜松市天竜区佐久間町「川合花の舞保存会」

○三遠南信の鬼／九州の鬼神

放送大学宮崎学習センター客員教授 永松敦

○祈りと芸能の祝祭「花の舞」の創造をめぐる

國學院大学大学院生 宮嶋隆輔

○深山の祝祭—展示構想と背景—

静岡文化芸術大学准教授 田中裕二

11月16日(土)

■展示期間中の催し

入場・来聴料 無料(事前申し込み不要)

2024年11月15日(金)～20日(水)

静岡文化芸術大学ギャラリー

【主催】 静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター
【共催】 浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会

次世代継承活動の紹介②

遠州大念仏親子体験講座

日時…令和6年6月29日(土)

場所…積志協働センター1階ホール

参加市民…40人程度



浜松市指定無形民俗文化財「遠州大念仏」について、親子体験を含む講座が開かれました。当日は、寺島組の大村組頭が長年大念仏に携わった思いを語り、大念仏の歴史の説明を聞いた後、寺島組の実演と太鼓や双盤の楽器体験がありました。初めて双盤の前に立つ子どもにも保存会のメンバーが優しく打ち方を教える姿が見られました。

遠州大念仏寺島組に所属する角谷奏樹さん(浜松学院大学 地域共創学科3年)は積志協働センターへ令和6年度就労体験として勤務。インターン生の発案事業として体験講座が実現しました。

【講座を企画した角谷奏樹さんの思い】

「なぜ講座を開こうと思ったか」

寺島組は若者が多いのですが、他の組は若者が参加できていないことや、新型コロナウイルス感染対策による活動休止のダメージを受けていたり、人数が減っているということ

を知り、寺島組の当たり前が他では当たり前ではないということに気づきました。遠州大念仏を広めていきたいという思いがあり、自分の力で何か継続につなげることはできないかと考えました。

「遠州大念仏から一度離れた時期もあると伺いました」

小学校4年生くらいから中学の初めくらいまでは毎夏参加していました。しかし、部活が忙しくなって参加しなくなりました。大学生になって久しぶりに行った時に居づらさがほとんどなく、また、音を聞いたら身体が覚えていて、自然と踊ることができました。

「講座を開催してみたいかですか」

遠州大念仏に関する説明の時間や準備や調整の点は改善の余地があるものの、寺島組の舞の披露と道具の体験を実現できてよかったです。



浦川郵便局

「うら川かぶきまる」

期間限定スタンプ

佐久間町の浦川郵便局では開局150周年を記念した小型記念印を押印している。

浦川歌舞伎のキャラクターの名前は「うら川かぶきまる」。浦川小の児童が名付けた。押印できる期間は、8月～来年7月まで。

郵便局と同じく150周年を迎えた浦川小は令和7年3月の閉校が決まっている。その閉校前に小学生が歌舞伎を公演をする。

浦川歌舞伎特別公演
日程…令和7年2月28日(金)

午前10時

場所…浦川小体育館
演目…白浪五人男



日本の仮面展の

懐山の面の威容

浜松市無形民俗保護団体連絡会 事務局長 柴田宏祐

「日本の仮面展」に日本全国の仮面が展示される中に懐山おくないの面があることを知り、その様子を取材してきました。

大阪、千里の万博記念公園にある国立民族学博物館に展示されていました。先の万国博覧会で岡本太郎がデザインしたモニュメント「太陽の塔」が入口に聳える公園の奥にある博物館で3カ月に

わたる展示が行われていました。

この博物館が創設50周年を記念して、館の所蔵の面はもとより日本各地に所蔵されている貴重な面が約700点余展示されていました。

その中に懐山の五面が展示されていました。遠山の霜月祭、新野の雪まつり、古戸田楽等三遠南信から幾つかの展示が目立ちましたが、静岡県からは懐山だけでした。

その特異性から千葉の国立歴史民俗博物館に收藏されているレプリカの中から五面が選ばれて展示されていました。

世界最大規模の民族学博物館で研究されている54人の先生方の中で今の展示を企画された館の教授笹原亮二先生から展示の方針や特色を展示コー



青 鬼



赤 鬼



黒 鬼

ナーを巡りながら説明をいただきました。

仮面の歴史を縄文期から現在のアニメや漫画に至るまで系統的に説明する中で、第三部「仮面の諸相」の中の「鬼」の部に懐山の赤・青・黒の鬼の面が鎮座していました。鬼といえど節分会で悪者のイメージが強いですが、

各地の芸能や祭りに登場する鬼は善悪両面を有しました。そのことを現すかのように髪を逆立て、ピンと髭を張りながらも親しみのある表情で温かく出迎えてくれました。



猿面を頭の横に鉢巻きで固定して演ずる



舞手が仏面を額の横につける

コーナーでは様々な面と付け方の方法の一つとして「懐山おくないでは『年男』の翁役の嬬役が翁面と松かげ面を『仏の

舞』の舞手が仏面を額の横につけ『猿の舞』の舞手などが猿面を頭の横に鉢巻きで固定していつでも演者の顔がよく見える」と解説されていました。

懐山おくないを継承する若き担い手の大石紘明・泰成兄弟の演ずる「仏の舞」写真の笑顔がこれからの行く末を示すかのように輝いていました。会長大石寅十さんの獅子をあやすフットリの優しい表情は会場全体を和ませていたようでした。(五面は展示されたもの)



仏 面



猿 面

文化財としての民話

—天竜・熊での民話の採録から—

静岡文化芸術大学教授 二本松 康宏

静岡文化芸術大学の伝承文学ゼミでは、二〇一四年から北遠で民話の採録調査に取り組んできた。水窪で三年、龍山で一年、春野で六年。そして一年目となる本年度は熊を訪ね歩いて

いる。「熊」の地名の由来には諸説あるが、奈良時代の『万葉集』には「道のくま(隈)」という言葉がある。道の「まがりかど」という意味である。もともとの「くま」には「端のほう」とか「境」という意味もあった。そこから「曲がって

入り込んだところ」とか「奥まったところ」という意味も生じる。おそらく大昔の熊はそういう土地だったの

だろう。しかし、遠州の秋葉信仰が盛んになると、熊は「曲がって入り込んだところ」でも「奥まったところ」でも

なくなつた。秋葉山と三河の鳳来寺とを結ぶ信仰の道

は秋葉街道とも鳳来寺道とも呼ばれ、多くの参詣者たちが往来した。熊はその往還の中継地として繁栄する。

「市場」と呼ばれる街並みには旅館や茶店が立ち並んでいた。明治二五年(一八九二)には八軒の宿屋が営業し、一年間に六三九五もの旅客が宿泊したという。市場だけではない。秋葉街道に沿って神沢、高平、柴、石打にもそれぞれ数軒の宿屋が営まれていた。

*

*

誤解されがちだが、実は、伝説や昔話は山奥の集落には伝わりにくい。山奥の集落は、それこそ日々の暮らしに精いっぱい、伝説だの昔話だのを語り伝える余裕がないのである。また、集落の外との交流が少ないと、伝説や昔話の伝播にも

影響する。豊かな暮らしがあり、外の人々との行き来があれば、そこに「話」が生まれる。熊でも、秋葉街道に沿うようにしておもしろ

い話が採録されている。たとえば、引佐沢川の川

宇連宿から「笹んだ峠」を越えてくると峯神沢の集落に入る。その峯神沢では、磐田見付で大狒々を退治した犬の「しっぺい太郎」が、この地でも大蛇を退治したと伝えられる。

また、柴では信州から見付へ向かう途中の「しっぺい太郎」がこの地に泊まったといひ(信州への帰途とも)、そこを「しっぺ野」という。地名としても宿の屋号としても「しっぺ野」

である。柴から大地野を経て吉沢(佐久間町浦川)から三河へ向かう脇往還は善光寺街道とも呼ばれ「しっぺい太郎」のふるさとである南信州の光前寺(長野県駒ヶ根市)まで続いていた。荒唐無稽と言う勿れ。こうした異伝こそが「豊か

な伝承」なのである。それは旅人たちを迎えてきた寛容さでもある。

柴の「しっぺ野」も、峯神沢の「しっぺい太郎」の大蛇退治も、街道を往来する秋葉詣の道者たちには格好の土産話となつたに違いない。

*

*

かつて神沢の万福寺阿弥陀堂で執り行われていた正月五日の「おくない(田楽)」は、祭主となる祓宜家のほかに、西神沢、六郎沢、峯神沢の三集落から六〇家もの「宮講(みやご)」によって世襲されていったという。

水窪の西浦田楽では「しっぺ」の結界に入ってしまった



六郎沢での採録の様子

った犬の首が飛んだとか、戒めを破つて生臭を食してきた能衆の一人が石段で弾き飛ばされたとか、六月に執り行ったら赤い雪が降ったとか、様々な奇譚が伝えられる。祭りの厳かさを物語るものだろう。神沢の田楽にも、ひよつとした昔はそうした禁忌と奇譚が伝えられていたかもしれない。

その神沢から前述のように「笹んだ峠」を越えて川宇連宿に下れば寺野(宝蔵寺観音堂の「ひよんどり」)までは一〇kmもない。神沢から懷山(泰蔵院の「おくない」)へは秋葉道の脇往還でわずか八km。いずれにせよ目と鼻の先である。そこに文化と芸能の交流がなかったと考えるほうが不自然だろう。

伝説や昔話も同じである。山と里の暮らしが街道を往来する旅人たちと交わるとき、そこに「民話」が生まれ、語り継がれるのである。